

2011年度センター試験 英語問題総評



駿台予備学校・洛南高等学校講師 竹岡 広信

2010年の問題は不適切な問題が散見されたが、2011年は随分と改良された感がある。特に読解系の問題は、ますます「全体を把握する能力」が要求されており、この傾向が今後も踏襲されることを願ってやまない。

なお、解説中に登場する「正解率」は、今年実際にセンター試験を受験した生徒にお願いして調査したもの。母集団はおよそ70名で、英語筆記テスト200点満点の平均点は約163点の集団の正解率である。なお平均点が177.5の母集団との比較で特に正解率に開きがあった問題には、正解率の後に(差)と記した。

設問別講評【筆記】

第1問A

[正解率] 問1 24.3% 問2 37.1% 問3 62.9% 問4 68.6%

[解説] 今年も母音2題、子音2題の計4題の出題である。問1は、couchの発音は馴染みのない者が多いと思われるが、①、③、④が比較的簡単なので消去法が使える。問2は難しい。2009年に、日本人の弱点を突くcomfortという「アクセントのない音は曖昧音が原則」という面白い問題が出題さ

れた。これの裏をかくような問題である。つまり「アクセントがない母音でも必ずしも曖昧母音になるわけではない」ということである。formatという単語は日本語「フォーマット」にもなっており、使用頻度が高い単語であるから、例外的ではあるが、敢えて出題されたようである。「原則にとらわれず、1語1語しっかり発音記号を調べて発音せよ」ということだろうか。問3は-s-の発音を問う問題である。use, house, mouseなどは名詞の場合は/s/だが、動詞の場合は/z/となる。現行の出題形式では名詞、動詞の区別は難しいが、housingというように-ingを付加することで動詞であることを明示したわけである。なおcease, increase, chase, purchaseは、名詞でも動詞が同形で、いずれも/s/と発音される例外的な単語である。問4は、センターでは出題頻度が高い-ch- monarch「君主」は、私立大学の発音問題では散見されるが、日常での使用頻度はそれほど高くない単語で、センター試験では珍しい出題。頻出語を出し尽くしたために起こった現象かもしれない。

[対策] 音声を筆記問題で問うことには様々な意見がある。しかし、この正解率の悪さを考えるとこのタイプの問題は必要であるようにも思われる。綴り

第1問A

下線部の発音がほかの三つの場合と異なるものを、それぞれ下の①～④のうちから一つずつ選べ。

- | | | | | |
|----|--------------------|-------------------|-------------------|------------------|
| 問1 | ① <u>boast</u> | ② <u>couch</u> | ③ <u>glow</u> | ④ <u>toe</u> |
| 問2 | ① <u>format</u> | ② <u>instance</u> | ③ <u>manage</u> | ④ <u>passion</u> |
| 問3 | ① <u>enclose</u> | ② <u>housing</u> | ③ <u>increase</u> | ④ <u>resolve</u> |
| 問4 | ① <u>chemistry</u> | ② <u>monarch</u> | ③ <u>ostrich</u> | ④ <u>scholar</u> |

第1問B

第一アクセント（第一強勢）の位置がほかの三つの場合と異なるものを、それぞれ下の①～④のうちから一つずつ選べ。

- | | | | | |
|----|-----------|----------|-------------|-----------|
| 問1 | ① disease | ② infect | ③ landscape | ④ supreme |
|----|-----------|----------|-------------|-----------|

と発音の関係の大まかな枠をつかみ、特に外来語はこまめに辞書でその発音をチェックさせるようにしたい。

第1問B

[正解率] 問1 72.9% 問2 55.7% (差) 問3 54.3% (差)

[解説] 今年のアクセントの問題も非常にオーソドックスで、真面目に勉強してきた受験生は正解した

ものと思われる。「名詞は前にアクセント」「動詞は後にアクセント」の大原則に当てはまらない単語が二つ出題されたが (disease「病気」, occupy「～を占有する」), どちらも使用頻度の高い語であるため仕方ないかもしれない。問2の prosperous や問3の epidemic は、どちらも類出語尾 -ous, -ic である。

[対策] 発音問題は中位層も上位層もまんべんなく悪いが、アクセント問題は、二つの集団で差がつい

第2問A

空所に入れるのに最も適当なものを、それぞれ下の①～④のうちから一つずつ選べ。

問1 Dad, if my grades improve by the end of the term, would you mind my allowance?

- ① raising ② rising ③ to raise ④ to rise

問2 "I've been on weight recently."

"You should exercise more and eat better."

- ① carrying ② increasing ③ putting ④ reducing

問3 Kenji told me his trip to London was wonderful. I wish I in that program.

- ① had participated ② have participated
③ participate ④ will participate

問4 The houses look like rows of tiny cardboard boxes when you look out of the window of a plane in .

- ① flight ② flowing ③ flown ④ flyer

問5 The fans waited outside the door in the hope catching sight of the movie star.

- ① for ② of ③ to ④ with

問6 At our local health clinic, the doctor will only see you by .

- ① appointment ② approval ③ reputation ④ resolution

問7 Some people find difficult to economize on mobile phone costs even when times are hard.

- ① everything ② it ③ that ④ things

問8 I've finished writing my application. Who am I to give it to?

- ① announced ② applied ③ pointed ④ supposed

問9 All the children in the family will for the New Year's holidays.

- ① crowd ② form ③ gather ④ set

問10 My brother loves baseball. He's an enthusiastic, not a gifted, player.

- ① as ② if ③ or ④ so

ている。つまり筆記の合計点との相関関係が高いと言える。これは、中位層の学生の方が「音読」訓練ができていないためと思われる。アクセントの原則を徹底し、普段から法則性を意識して(たとえば damage を発音するときには image, message, manager などと一緒に)覚えるように指導したい。

第2問A

問1 [答え] ① [正解率] 81.4%

[解説] rise / raise の識別には驚いた。この識別は2005年に出题されたばかりである。過去数年に本試験で出题された問題が、再び本試験に登場することは珍しい。今後もこの傾向が続くならば、過去問題の研究をさらに徹底しなければならない。

問2 [答え] ③ [正解率] 75.7%

[解説] put on weight / gain weight で「体重が増える」。2009年の文法問題の問題文中に gain weight という形はあったが、put on weight の出題は初めてである。put ~ on は、他動詞+副詞の熟語であるから、もし代名詞を目的語にとる場合には put it on としなければならないことに注意したい。なお本年度の語句整序問題には call him in, リスニングの問題に put you down というのが出題されている。

問3 [答え] ① [正解率] 82.9%

[解説] オースドックスな仮定法の出題である。選択肢に過去形がないことが面白い。微妙な出題ではなくて、仮定法の大枠が理解できておれば解決可能な問題。なお《I wish S had + 過去分詞形》の出題は1987年以来。今年は大問5にも仮定法に関連した問題が出ていた。

問4 [答え] ① [正解率] 78.6%

[解説] 動詞の fly 「飛ぶ」の変化形は fly ; flew ; flown. flow 「流れる」の変化形は flow ; flowed ; flowed. 両者を混同している受験生は相当多い。この違いが分かっているならば、少なくとも② flowing は消える。また前置詞の後に③の過去分詞はおかしいし、④の名詞には冠詞が必要。よって消去法から解けるはず。文法問題としては珍しい問題。

問5 [答え] ② [正解率] 42.9%

[解説] hope は、自動詞で hope for ~ 「~を望む」の意味。よってそれを名詞化すると the hope for

~となってもいいはずだが、残念ながら、hope は例外的に in the hope of ~ 「~を望んで」となる。これを考慮すれば①の for を選んだ者が42.9%もいるのは仕方あるまい。例外には他にも in search of ~ 「~を求めて」がある。この問題は、名詞構文の基本を理解した上で推測すると間違えてしまうという、例外を突いたもの。とても良問とはいえない気がする。

問6 [答え] ① [正解率] 80.0% (差)

[解説] 答えとなる an appointment 「(正式に)人と会う約束、歯医者などの予約」は、センター試験では何度か登場している。ただし see 人 by appointment での形は初めて。中位層と上位層で差がついた問題。

問7 [答え] ② [正解率] 94.3%

[解説] 一見簡単そうであるが、英作文では、日本語につられて find + 形容詞としてしまう人が多い。しかし、4択問題にすると極めて簡単な問題になってしまう。選択肢に「何も入らない」というのがあれば間違える人はもう少し増えたことと思われる。

問8 [答え] ④ [正解率] 71.4% (差)

[解説] 2008年の追試で出たばかりの問題が出題されたのは驚きである。be supposed to V は「Vすることになっている」という意味の重要表現。②を選んだ者が17.1%もいるが、be applied to は、to の後ろに名詞がくるからあり得ない選択である。

問9 [答え] ③ [正解率] 48.6% (差)

[解説] 拍子抜けするぐらい簡単に見える問題だが、gather が答えとなる文法問題は意外と少ないためか、正解率は低い。④を選んだ者が41.4%もいる。set for ~ 「~に向かう」を形だけで選んだようである。やはり中位者と上位者で差がついた問題。

問10 [答え] ② [正解率] 45.7% (差)

[解説] A, if not B 「たとえ B でないとしても A」は、よく出てくる形だが、正解率は低い。①を選んだ者が32.9%もいるのは、「山勘」であろう。なおこの熟語は2011年の東大の正誤問題と京大の下線部訳にも登場している。

第2問B

問1 [正解率] 95.7%

問2 [答え] ③ [正解率] 60.0% (差)

第2問B

会話の空所に入れるのに最も適当なものを、それぞれ下の①～④のうちから一つずつ選べ。

問2

Waiter : So, are you ready to order?

Customer : No, not really. What do you recommend?

Waiter : The shrimp pasta is very good!

Customer : Really?

- ① Eventually, I'll get over that.
- ② I guess I'll go on with that.
- ③ I'll have that then.
- ④ OK, so then I'll be that.

問3

Chester : Do you have any plans for the summer vacation?

Annalee : I'm going to Japan for two weeks.

Chester : How exciting! I've always wanted to go.

Annalee : Yes.

- ① I hope I can go someday.
- ② I hope you enjoy yourself.
- ③ It'll be great to live here.
- ④ It'll be the trip of a lifetime.

[解説] 上位層の正解率は85.2%だから、中位層と上位層で随分と差がついた問題。④を選んだものが34.3%もいる。いわゆる「ウナギ文(私はウナギだ)」。日本語で「私はそれだ」と考えたための間違い。

問3 [答え] ④ [正解率] 48.6%

[解説] まず、Annaleeは「京都に行くことになっている」と発言していることから、①は消える。またChesterは「行きたい」とは言っているが、具体的に予定を示しているわけではないから②もおかしい。③はhereがthereであるならば正解の可能性はある。以上から消去法で④を選ぶことになる。the trip [chance / experience] of a lifetime 「一

生で最高の旅 [機会/経験]」は受験生には馴染みが薄いであろうから、消去法で選ぶしかない。

[対策] センター試験の過去問題の会話文を3、4回繰り返しやっておきたい。なお、会話文の弱い生徒はリスニングで戸惑うことが多いため、リスニング対策も兼ねていることを忘れてはならない。

第2問C

[正解率] 問1 84.3% 問2 21.4% (差) 問3 88.6%

[解説] 一昨年から文脈が追加され、「パズル的に解く」のではなく「何が言いたいのか」を考えさせる

第2問C

下の語句を並べかえて空所を補い、文を完成させよ。

問2 “What's up with Jack? He seems so happy.”

“He applied for a new job, and _____ an interview.”

- ① called
- ② company
- ③ for
- ④ him
- ⑤ in
- ⑥ the

傾向が強まった。今年もその傾向を踏襲した。問1は毎年のように出題される「後置修飾」。問3は、やはり頻度の高いSVOCの形。問題は問2である。選択肢と文脈から「会社が面接試験に来るように電話してきた」という内容であることが推測できれば、the company called him for an interviewまでは分かるはずである。後はinの置き場所であるが、pick it up, bring it back, pick him up, write it downなどの「他動詞+副詞」の熟語では、代名詞を目的語にする場合「他動詞+代名詞+副詞」の語順になること。このことが分かればcalled him inという正解を導けるはずである。call～inという熟語は日本の受験生には馴染みがないため、「パズル的に解く」受験生は、混乱したようである。[対策] 語句整序は、「パズル的な解法」ではなく「この文が言いたいことは何か」を常に考えながら解くことが大切。

第3問A

[正解率] 問1 87.1% 問2 91.4%

[解説] 概ね出来は良い。ただしcomprehend, eliminate, pessimisticなどの語彙が分からないレベルだと解けない。

[対策] 語句の意味の推測の訓練はもちろん大切だが、標準的な語彙をつけることの方が大切であろう。

第3問B

[正解率] 92.9% 87.1%

88.6%

[解説] 去年はやや悪問だったが、今年は「それぞれの主張を端的にまとめたモノを選ばせる」従来の良問に戻った。全体的に正解率が高いが、本文中に登場するHamletやOthelloを見て、「悲劇だ」とわかるぐらいの常識も必要である。

[対策] 普段から、どんな英文でもパラグラフ毎にその要旨を書かせるように指導したい。

第3問C

[正解率] 88.6% 71.4% (差)

71.4% (差)

[解説] この問題はここ10数年で様々な問題形式に変化しているように見えるが、尋ねているポイン

トは一貫している。英文を読む上で必要なポイントは、①抽象的な表現から具体的な表現へ ②butなどによる逆接の確認 ③代名詞, this, so, suchなどの指示詞に注目する、の3点である。なお、扱われているポイントは、2007年は③/③/①、2008年は③+②/①/①、2009年は①/①/①で、2010年は①/①/①、2011年も①/①/①であった。とにかく日本人の論理構造が「具体から漠然」となってしまうことが多いため、この手の問題は良問だと言える。さらに、中位者と上位者と差がついているのも、中位者は上記のポイントをとらえていないことが原因であろう。

[対策] とにかく、普段の英文解釈から上記のポイントを頭に置いて読むべきであろう。

第4問A

[正解率] 問1 91.4% 問2 90.0% 問3 97.1%

[解説] 今年も比較表現を中心にした良問 (EU諸国の価値観の違いについて) である。問題自体は決して難しくはないが、toleranceやidentifyやdiversityレベルの語彙がないと辛いかもしれない。もはや「センターレベルの単語」などという表現など存在しない気がする。

[対策] 「比較」は特殊な慣用句ではなく、図表を読み解くのに必要となる基本的な表現を徹底的にマスターしたい。さらに、数学や地理や生物を選択していない文系の生徒には、図表を苦手とする者も意外と多く、そうした生徒には早い時期から過去問題をやるように指導しなければならない。

第4問B

[正解率] 問1 84.3% 問2 87.1% 問3 85.7%

[解説] 新聞の広告に関するチラシを見て、設問に答えるTOEIC型の問題。特に特殊な知識は必要ないが、慣れていないと時間がかかってしまう。本文中にあるsubscriberや、money-transfer slipなどは比較的難しいが、この手のチラシにはよく出てくる単語である。

[対策] 短時間で必要な情報を素早く見つけるための訓練が必要であろう。TOEIC関連の問題集も効

果的である。とにかく様々なパターンに慣れておくことが重要である。

第5問

[正解率] 問1 88.6% 問2 95.7% 問3 97.1% 問4 91.4% 問5 94.3%

[解説] 昨年の問題形式とは若干異なるが、「複数の情報から正解を導く問題」という位置づけは同じである。家族に合わせて苦勞しているお父さんの姿が涙を誘う。本文中に I would have preferred something other than hamburgers and fries for lunch という仮定法の文があり、これが設問に絡んでいる。「仮定法の出題は何も4択の文法問題に限らないよ」ということが言いたげである。語彙も昨年に比べると随分と平易であるが、stand in line「列をなす」や、autograph「(芸能人などの)サイン」、a big deal「たいしたこと」、get stressed out「かなりストレスがたまる」、all in all「概して」などは戸惑った人もいただろう。

[対策] 情報を的確にとらえる訓練は、センターの過去問題(形式が少々異なっても大丈夫)が有効。また日常でよく使われる表現は積極的に覚えたい。

第6問

[正解率] 問1 97.1% 問2 84.3% 問3 88.6% 問4 71.4% 問5 85.7% 問6 91.4%

[解説] 全体を読んで「何が言いたいのか」をつかみ、その方向性を考えて解けば良い問題である。従来の物語・エッセーが出題されている頃から、センターの長文は「全体のテーマ」を考えて解く問題であったが、3年前からこの傾向が明確になった。昔から、長文読解と言うと、「一つのパラグラフを読んだら問1を解きましょう」とか、「答えは第何パラグラフの第3文にあります」などの、「本来の読み方」に逆行するような問題集や指導が横行していた。よってセンター試験は、第3問の延長として、パラグラフ全体→文全体をとらえさせるための問題として、この第6問をリニューアルしたのである。よって、とにかく全体を読んで、方向性をつかみ、設問は最後に一気に解く、という「正攻法」が大切である。今年は、受験生に馴染みのない素材「齧歯類について」を扱うことで、細かく読むのではなく全体

像をとらえさせようとしたものである。出来の悪い問4は選択肢②を選んだものが14.3%で、subspecies という単語に惹かれたものと考えられる。

[方針] 普段から「ダラダラと全訳する」のではなくて、パラグラフ毎に言いたいことをメモすることを習慣にさせたい。

設問別講評 [リスニング]

第1問 [正解率] 問1 87.3% 問2 95.8% 問3 63.4% 問4 12.7% 問5 64.8% 問6 78.9%

[解説] 問4は、a dollar fifty「1ドル50セント」の意味が分からなかったために①を選んだ受験生が69.0%もいた。

第2問 [正解率] 問7 85.9% 問8 83.1% 問9 63.4% (差) 問10 93.0% 問11 63.4% 問12 35.2% (差) 問13 87.3%

[解説] 問12は④にした受験生が50%以上もいる。You should check your temperature. なら正解の可能性もある。問9、問11の正解率が低いのは、聴き取りの問題というよりも会話表現自体に慣れていないことが原因と推察される。

第3問 [正解率] 問14 66.2% 問15 69.0% 問16 76.1% 問17 90.1% 問18 62.0% (差) 問19 49.3% (差)

[解説] 問14は a cutting board「まな板」の意味が分からなかった、もしくは推測できなかった人が間違えたようである。問15は、「男性の意味することは」という問いなのに、①にした人が22.5%もいた。問18と問19の正解率が低いのは、英文自体の意味が分からなかったことが原因だと推察される。

第4問 [正解率] 問20 64.8% (差) 問21 69.0% (差) 問22 66.2% (差) 問23 70.4% (差) 問24 71.8% 問25 74.6%

[解説] 中位層と上位層で差がついた問題が多い。これはリスニングの力が、単に「聞く」だけの力に止まらないことを示している。

[対策] 普段からナチュラルスピードの英文を聞いて、音読する癖をつけさせたい。また、会話表現に慣れるためにも、筆記の会話を数多くやらせたい。